

3.11から 大槌と 子ども



大槌町教育委員会
伊藤正治 教育長

子どもの笑顔あふれる町に

2012年4月22日。花冷えの空模様でしたが、出席者の心には春の温もりが大きく広がっていました。震災大津波からわずか1年で、応急仮設住宅以外の本格的な子どもの居場所としての「大槌町子どもセンター」の誕生という記念すべき日でした。

パレスチナ子どものキャンペーンの皆様には、被災直後から避難所での炊き出しや生活用品の提供、流出拾得された膨大な数の写真の洗浄や修復作業、そして、避難所における子どもたちの居場所づくりや心のケア等物心両面に亘る多くの温かい支援をいただいて参りました。

特に、子どもたちを取り巻く環境の改善につきましてはきめ細かい心配りの元に、親身になって対応していただきました。中でも、在籍児童71名中65名が家屋の流失という大被害にあった安渡小学校での「子どもスペース」や「子どもテント」の子どもたちの居場所は、子どもたちに失われた日常を取り戻すだけでなく、明日を生きる希望と勇気を与えてくれました。

被災による子どもたちの心の痛手にさらに追い打ちをかけたのは、各地へ避難していった親しい友との別れでした。震災前、町内には小学校5校、中学校2校で1263名が学んでいましたが、現在は804名を数えるまでに減少してしまいました。また、48カ所にまで分散した応急仮設住宅団地は、学区の崩壊をもたらした震災前の小学校4校は統合せざるを得ない状況となり、学校の配置は、2中学校区に小・中それぞれ2校となりました。当時の被災5校は仮設校舎での生活となり、4度目の仮設校舎での卒業式を迎えることとなりました。新校舎建設は、2度の入札不調の後ようやく落札・着工し、2016年9月の落成をめざし本格工事が進められています。

仮設校舎での生活が始まってまもなく、パレスチナ子どものキャンペーンより町の子どものために無償の施設を提供したい旨のお話をいただきました。実現に向けて、施設の建設場所や活用、運営についてパレスチナ



4年

たちの今



東日本大震災から4年たちました。2011年3月から関わってきた岩手県大槌町の今と子どもたちの様子について、大槌町教育委員会の伊藤正治教育長からご寄稿いただきました。

子どものキャンペーンには大変なご苦勞をおかけしました。当初は、パレスチナ子どものキャンペーンの運営でたくさん子どもたちが利用させていただきましたが、2012年9月に当教育委員会に移管し今日に至っております。

現在は、パレスチナ子どものご支援による専門員1名と町配置の職員4名の5名で、放課後の子どもの居場所としてだけでなく、長期休業中の多様な活動の場として有効活用が図られております。これまでに、120余名の子どもたちの登録があり、常時50名を超える子どもたちが訪れています。

こどもセンターを訪れる子どもたちの生活環境も多様で、仮設住宅で生活する子どもたちは今なお36%にも上ります。自力再建を果たし新しい住居で生活する子、災害公営住宅に入居した子、そして、厳しい住環境の仮設住宅での生活を強いられる子、震災前の生活が維持できている子と生活環境の違いが、心のあり方にも大きな影響をもたらしています。心のケア、サポートを必要とする子どもは町全体では20%近くに上りますが、震災から4年を経過し、その要因が震災津波そのものによるのか、もともと個々が抱えていた家庭の事情によるものか混然としてきており、今後もスクールカウンセラーなどにより継続的な対応が求められます。

今後、被災された皆さんの生活の再建、市街地の形成、公共施設の復旧など復興が進むにつれて、子どもたちを巡る環境も大きく変化するものと思われれます。それにつれてこどもセンターに求められるニーズも多様化すると思われれますが、子どもたちの健やかな成長、幸せを願うたくさんの皆様のご支援ご協力をいただきながら、よりよい居場所作りを努めたいと思います。

当会は今年も大槌町こどもセンターの支援を継続しますので、引き続き大槌町と子どもたちへの支援をお願いいたします。

